

---

# 神様、ご褒美をください

さくらちゃ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様、ご褒美をください

### 【Nコード】

N4172BA

### 【作者名】

さくらちゃ

### 【あらすじ】

「父上、この子をうちの子にしてください。いや、します。違うな……しました!」

「相談でも予言でもなく……決定事項の報告なのか?」

突如、貴族の家に入ることになった孤児の魔術士ミュー。

個性豊かなろくでなしのお貴族様たちに囲まれて、幸せになれるのか……?

ミューの成長を見守る異世界ファンタジー。

## 自由業は儲からない

一、自由業は儲からない

どうすつかな。

身を守るためには仕方がない状況だけど、やはり気をつけた方がいいよね。生まれ持った資質というのは隠し通せるものではない。

「お、お前！」

「あまり騒がないでください。直ぐに終わりますから」

一陣の風が舞い、路地裏は静けさを取り戻す。先程まで短刀を突きつけて頭の悪そうな脅し文句を吐いていた男達は、跡形もなく消え去っている。自分にしてはずいぶんと手荒なことをした。まあ、彼等が居なくなつて困るかと言われれば自分は困らないし、問題はないと思う。

周りに人が居ないことを確認し結界を解いて、さらつと髪を掻きあげてから大通りへ向けて歩く。 >br< ここはノイル王国首都アレグレット旧市街。

簡単に言えば古い町並みを残す歴史ある場所だが新市街から追われた者が暮らす暗さや湿つぽさを感じる場所である。自分はこの旧市街の教会裏に捨てられていた。孤児だ。墓場に捨てられていた自分は虫の息で、拾ってくれたラフラン神官が言うには、生まれた方がいいが身体が弱く育たないと思われたのだろつ、とのことだ。そう、自分は身体が弱い。

大通りを横切つて新市街へ向かう。新市街の庭園なら寝転がつて

休んでいても安心だ。安心というのは、物取りや人身売買の被害に比較的あわずに済む、ということだ。

さあて、今日はどうするかな。孤児である自分が金を持っているわけがないので酒や博打には縁がない。何より、まだラフラン神官に見つけられてから十三年しか経っていない自分がそんなことに興味を持つこともない。仕方がない。休憩しつつ夜を待つか。ちくちくする芝生の上で、ごろん、と寝返りをうった。

「こんにちは」

刹那、息を止める。

「いい天気だね」

「……………そうですね」

あと握りこぶし分ほどで顔がくつつくような所に男が寝転んでいた。金髪碧眼の垂れ目。見るからにご婦人方に噂されそうな綺麗な顔立ち。

不可解だ。こんな男が寝転ぶことが普通あるかどうかよりも、自分に話し掛けてくるかどうかよりも 気配が無かった。少なくとも自分が寝転ぶ前にはこの男は隣になど居なかった。

「君、いつもここで寝転んでるよねえ」

「ええ。それより話にくいので少し離れてもらえませんか？」

「ん？そう？」

不思議そうに眉をしかめながらも少しずれてくれた。その隙に半

身を起こし、男を観察する。白い軍服。胸に金色の百合の花の階級章が五つ並んでいる。視線がどこを見ているのか気がついたのか、にこっと笑うと男は起き上がった。やばい、よね。天敵だ。

「いきなりごめんね。ちょっとだけ気になって」

細かい芝生を軽く払いながら、笑いかけてくる。その笑顔はまるで子供に接するかのようだ。いや、自分はどこからどうみても男の子か、当然のことだ。ならば子供らしく無邪気さを持ってかわしておけば問題にはならないだろう。

「何かあつたんですか？白鷹の団長様」

「ああ失礼。名乗ってなかったね。スコール・クロイツという。君が言った通り白鷹の騎士団の団長をしているんだ」

「自分はミュー……ミュールです。ミューとお呼びください」

頷きながら一瞬鋭く目が光って、調べられたのがわかった。でも気が付かないふりをする。普通の子供にはそんなことわかるわけがないのだから、と思う。ミューという呼び名は本当だ。名を名乗ったって今の暮らしが変わることもないし、素直に教えた。孤児のため家の名はないのだから、ミューで十分通じる。怖がらず揺るがずに見返してやる。すると元の通りに優しい笑みを浮かべて騎士団長は気さくに話し掛けてきた。

「君は……家は？」

「自分は旧市街の孤児院に住んでいます」

なるほど、とまた頷いて気の毒そうな目を向けた。演技だろう、と思う。大人とはそんなもんだ。質問は続き、勉強やら仕事やら暮らしぶりやらについて慎重に答えていく。自分にさほど興味はなさそうに見えるから、何が目的なのかを推し量る。名前を名乗った時以来これといった変化がみられず、読めない。もちろん、白鷹の団長の栄誉については知らない人の方が珍しいため疑いをもって見る自分がおかしいのである。腹に一物抱えた自分にはこうするしかないのだ。

「ところで、騎士に成る気はない？」

「ほえ?!」

唐突過ぎて変な声が出た。どこからそんな話がでてくるんだ。今までの質問は不審者の身許を確認するためのものではなかったはずだ。

騎士とは。

ノイル王国では権力と敬意と憧れとを象徴する職業の一つで、基本的には貴族の称号を持つ者達で組織され、領土の巡察や警備を行っている。騎士団が結成されておりそれぞれ役割が違った。赤虎、碧狼、黄鯨そして白鷹の四つである。中でも目の前の人物が率いる白鷹の団は首都と王城を守る最後の要であり、近衛も勤める花形だ。文武に優れた一流貴族が特に多いことでも知られる。この騎士団長のクロイツ家も王族に連なる最高級の貴族だ。……普段なら絶対にこんなところにはいないのに。

「実は以前から神隠しがあってね」

「神隠し？」

自分のおうむ返しに優雅に頷く。うん、やはり白鷹の騎士団長は格好良い。

「大人……男が数人単位で消息を絶つことがあってね。まあ居なくなつて清々するようなつまらない小悪党ばかりなんだけど」

へえ、と相槌を打ちながら自分に対する揺さ振りだと感じた。念のために結界を張っていたのに、どこでどう見られてしまったんだろう。だいたい風が吹いたと思つたら消えている、という程度の時間しかかけないようにしているのに、ああそっか、今日のだね。消し去る前に切り刻んでしまったからその分の時間で見られてしまったのかもしれない。この方も騎士団長つてくらいだから自分の結界くらい簡単に覗き見ることが出来るのだろう。

「神隠しの人数が増えてきてね、噂にもなつてきてしまったし……魔術省にも気をつけて観てもらつたんだ」

「魔術省……」

しまった、厄介なお役人が出てきてしまった。そんな大事にしながらもいいのに、と若干不愉快になりつつも最近多く人を消しているなという自覚もあったから魔術省の介入は仕方が無い。自業自得だ。

自分から話すべきか。話したらどうなるのか。この様子だと検討をつけて自分のところへ来たはずなのに、騎士つて。

「魔術省の長官が結界を見つけたつていうから急いで来てみたら、君が結界から出て来たんだ」

ほら、バレバレじゃないか。言い訳しようかな。

「だからスカウトしようかと思って。ね、どうかな？」

満面の笑みとはこれである。思わず、はい、とか答えてしまいそうだが歯を食いしばって堪える。無理な理由がある。

「……自分は孤児です、貴族や名のある商家の出ならまだしも」>br<>br<「そんなの養子に入ればいいさ、なんなら私の弟になればいい。それに考えてもみてごらん？手紙の運び屋なんかよりずっとお金になるよ」

ぶるつと身体を震わせてしまった。お金を持ち出してくるなんて、大人はずるい。

自分の仕事は手紙の運び屋だけではなかった。生きるために、孤児院に暮らす子供達のために、歳をとって足が不自由になったラフラン神官のためになんでもした。手紙の運び屋や港の荷卸しなんかはとてもまともな仕事だから騎士団長に伝えても大丈夫だと思っただけで、言えない仕事も多く引き受けている。

気持ちを落ち着かせるため深呼吸してみても、やっぱり騎士団長は笑ったままで何も変わらない。即戦力となる術士が欲しいのだろうか。魔術省ならいくらでも優秀な術士が在籍していると思っていたが違うのだろうか。

「断るのは構わないけど、代わりに色々話を聞かせてもらうことになるよ」

この白い軍服の美しい人は、牢でね、と付け加えた。そりやそうだろう。騎士団長ともあるうお方が臭うどころか火元から現れた人間を簡単に逃がしたりはしない。

だが、自分だってどうしようもない理由がある。断るしかない。



こればかりは魔術でも変えようのない事実なのだ。ため息をついて、騎士団長を真っ直ぐに見つめた。

「申し訳ございませんがお断りいたします」

「覚悟のうえかい？君のような『自由業』の子供は捕らえられると大変だと思うよ？」

「騎士になるためには性別を変えなければならないのです」

「え？」

騎士の条件。

当たり前過ぎて忘れられていることの方が多いが、男性であることが必須だったはずだ。麗しい微笑みのままに曖昧な言い回しではつきりと脅しをかけてくれたが、今はじっと自分の顔を見ている。

「……女の子かい？」

「孤児がその性別とわかると死ぬより苦しいだろうと神官様が」

笑みが消え、ああ、と唸るように微かに頷いた。

何故かはわからないが聞いた話では女兒の出生率がきわめて低下しており、街中には男性が溢れかえっているのだ。貴族の間では女兒が生まれるだけで聖女の如く扱われ、一流と呼ばれる貴族からの縁談が引つ切り無しにやってくるというお祭騒ぎらしい。商家ならば娘を貴族に嫁がせ発言力を増す、ということも出来る。

その一方で最下層のその日暮らしの者達は女兒を高値で取引するということもあり、社会的な問題となっていた。

「賢明なる神官殿に敬意を」

しゅつ、と剣を腰から抜き去ると膝を立て、頭を垂れる。祈りだ。何だかむずむずと居心地が悪い。こんな立派な騎士がまるで自分に祈りを捧げているみたいではないか。

しばらくすると顔を上げ、するすると剣を鞘へ戻す。>br<>br<「まあ、それとこれとは別問題だね。騎士にはならずとも君には我が家へ養子に来てもらおう」

騎士にならないのに牢屋ではなく養子に、とは。猫の手も借りた状態なのだろうか。それならわざわざクロイツ家に入らずとも、とまで考えて思い直す。

自分には価値がある。独学の魔術よりも、子を宿せる女としての身体がこの騎士団長の家には必要なだろう。政治には巻き込まれたくないが、クロイツ家に入るとなるとそういうことなのだろう。

でも、やはり否定的な考えが浮かんでしまう。自分が強い魔力の持ち主だということが示す、身体の弱さだ。もっと自分が小さかったころ、教会の斜向かいの、衣服の繕いを生業としているお針子のお姉さんが出産で意識を失ったことを覚えている。運よく2日後に意識を取り戻したが、あれを見た幼い自分には恐怖として記憶に残った。普段は他のことに押し退けられていてもきっかけがあると素早く前面に出て主張する嫌な記憶だ。忘れてしまうような記憶は自分に優しい記憶なんだな、とあらためて思った。

「……君はずいぶんと思慮深いね」

「ああ、つい。ごめんなさい」

「苦勞してきたんだね……」

ぼんぽんと頭を撫でられ、苦笑される。思慮深いと苦勞が滲み出るのだろうか。すくつと立ち上がり、騎士団長は手を差し延べてまるで夢の中の王子様を見ているかのような神々しさで声高らかに誘った。

「では行こう！」

養子になるなんて一言も言っていないが、断れないのは決定だろう。だいたいなんで　　なんで自分が最も秘密にしている問題を話してしまったのか。差し出された手をしばらく見つめてから再度騎士団長の様子を伺う。余りにも邪氣を押さえ込んだ爽やかな顔に惑わされた、と思うしかない。こくり、と喉を鳴らして大きな手の平へ自分の小さな薄汚れた手を重ねた。>br<>br<「それで、名前は？」

力強く引つ張られたせいで前につんのめりながら、空耳かと思った。騎士団長にぶつかりそうになって踏ん張り、自分よりもずっと高い位置にある透き通る金髪を見上げる。

「ミューですが」

「ミューだがミュールではないだろう」

驚いて目を見開く。この方は見破っていたようだ。恥ずかしくて気まずい。

「ミュ……ミューズです、ほんとに」

「可愛い名だ」

ギョツと手を繋がれたまま、よたよたといっていく。可愛らしいだつてさ。顔が熱い。自分が女扱いされるなんてなかったから、どう応えていいものかわからずにただ黙って頷くしかなかった。ふと顔を上げると、五人の騎士が、鼻先を撫でたり首を叩いたりして馬を宥めながらこちらを見ていた。全員白い軍服、白鷹の騎士だ。

今のやり取り、見られてた、とかそんなことないよね。ましてや声が聞こえてた、とかさ。暑くもないのに、つうと額から頬に冷たい汗が流れる。

「待たせた」

やっぱりこやかに自分の団員たちに声をかける騎士団長に、片手をあげて一人が応える。あの人も、やっぱり眉目麗しい。もやっと自分の気持ちが陰った。

「引き抜き成功ですか？ダンチヨ」

いや、と否定する。全員がきょとんどこちらを見る。騎士に成りたい人間は多く、しかも白鷹で、騎士団長から直々にお誘いを受けたいにも関わらず『引き抜き』ができなかったこと、が信じられないのだろ。少し緊張した。誰もが聞きたいであろう、何故、に対してどう説明するだろ。自分から隠し事を話してしまったから仕方がないけれども、どうしよう。

「まずは見習い……小姓から、ね」

ぱちん、と片目をつむって意味ありげに合図をされる。それはそうか、と他の騎士たちが納得しているところに水を差すようだ。

成らないから、騎士に。残念ながら。

何も言わない、何も言えないことに僅かなイライラを覚えながら、

馬へ騎乗した。

## 貴族に成る理由

### 二 貴族に成る理由

時遅くして、後悔は先に立たず。キラキラと光り輝く部屋の壁際でガタガタと震えながら座っていた。ラフラン神官に何も言わずにここまで来てしまったことが、気になっている。後で一度帰ると伝えよう。

それにしても、薄汚い自分を見てもこのお屋敷の使用人は表情ひとつ動かさずにいた。さすがはクロイツ家の使用人良く教育されている、と言えばそれまでだが、自分には不気味に映った。街の人間は言動で考えがわかるがこの使用人たちは何を考えているのかわからないため、どう思われているのかを想像してしまい、劣等感が巣くう胸をいちいち突き刺されているような気がしてならない。

騎士団長も騎士団長だ。お坊ちやま育ちのせいかな騎士という立場からか、お屋敷の入り口で待たせてはくれず、ただっ広い客間に通してしまふあたり貧乏人の気持ちなんてお構いなしなのだろう。なんだか呼吸をすることさえも、ふうわりと花の香りのする部屋の空気のせいで申し訳ない気になってくる。

カチャリというただのドアノブが回る音に、ヒツと息を吸い込んだ。無駄に驚くのもこの客間のせいに違いない。入って来た男性の使用人は自分の前に立ち止まると優雅に一礼した。

「皆様がお揃いになりました、ご案内いたします」

声も出せずにコクコクと頷いて、ずるりと長椅子から滑り降り立つと、使用人は来た道を戻りはじめた。後をなぞるようについてい

くとふと足音が耳に障った。自分がぱたんぺたんと足を鳴らすのに、この男性からは足音がしない。視線を落として踵を見ても上等な黒光りする革靴を履いていて、しっかりと床を踏み締めている。自分の靴はというと、革と帆布を縫って繋ぎ合わせただけの足の裏が怪我をしなければよいという程度のサンダルだ。ますます居心地が悪い。相変わらずぺたんぱたと歩きながら馬車道ほどもある幅の階段を上がって一番奥にあるドアの前で先導が立ち止まったのに合わせて止まる。

男性がドアをノックし、声をかけた。

「お客様を

」

「遅い！！」

すべてを待たず叫ぶようにして中から騎士団長がドアを開け放つ。なにやら興奮している騎士団長と、なにことも無かったかのように頭を下げて道を譲る使用人の男性に呆気に取られながらも、背を押されて入るように促された部屋へと入る。

視線が刺さった。

正面には赤髪に白髪が混じるいかにも紳士と呼ぶような男性と、左手に流れる様な金色の髪を結いあげた女性が品良く座っている。紳士の右隣には長めの豊かな赤い髪の若い男性と、鼻に眼鏡をかけた自分より少し年上であろう男性が座っている。

「ご家族の皆様大集合

か？

「どちら様かな」

ぞくり、と身体中に快感が走った。

喉の奥で転がすように発する低い声で、且つ冷めた口調だなんて！好きだ、好きすぎる！

身体がほてり出し、呼吸が荒くなった。なんとかもう一度聞かせてもらうことは可能だろうか。でも、自分から話し掛けるだなんて無理だ！ああ、なんという破壊力！握りしめる手に力が入る。

まあ、と咎めるような声でハツと我にかえた。

「こんなに小さい子に！もつと言いつてもものがあるでしょう？！」

「あ、ああ。すまない、怖がらせてしまったかな？」

女性が強くたしなめた。貴族もやはり強いのは男性よりも女性なのだ、と心へ留めておく。それにしても、困ったように謝罪されるのもそれはそれで良いものだ。にやけそうになる顔を引き攣らせ、なんとか背を支える騎士団長を見上げた。

自分の視線に気が付いてくれ、また微笑まれた。あの紳士と血の繋がりがあるのだとしたら、騎士団長も歳を重ねるとあんなに素敵な声になるのだろうか。早くそうならないかな。

「ご紹介いたします。ミューです」

「ミューさん、ようこそクロイツ家へ。歓迎しますわ」

……ならないかもしれない。騎士団長はどちらかと言えばこの女性と同じ微笑みをたたえている。がっかり。

「父上、この子をうちの子にしてください。いや、します。違うな……しました！」

「相談でも予言でもなく……決定事項の報告なのか？」

「どうということなの？スコール」



「この子は孤児育ちなのですが、高い魔力を持っているのですよ。今は安全のためにこのような姿をしておりますが」

一呼吸を入れ、金髪の女性へしっかりと照準を合わせて言葉を紡ぐ。

「母上、お・ん・な・の・子！ですよ！」

警戒からか驚愕からか、母上と呼ばれた女性は目を見開き立ち上がった。信じられるわけがない。自分は女に成れない女であり、この女性とは生き物としてまったく別の種類にしか見えないのだから驚かれるのも無理はない。

「おん、なの子……ですって?!」

「ええ、母上」

父上と呼ばれた紳士は額を手で覆いながら、はああ、と長いため息をついた。きっと男と女の区別もつかないのか、とか、息子の女を見る目がない、とかで呆れているに違いない。

何もかも騎士団長のせいだ。クロイツ家の人間のくせに孤児を養子にするだつて？馬鹿馬鹿しい。お坊ちやまは世間知らずであらせられるからどんなに常識外れかをご存知ないのだ。ついて来てしまった自分にも情けないやら腹が立つやら。

立ち上がった騎士団長の母上様はそのままそろそろと近付いてきて、身を屈め、目の高さを揃えてきた。こんな状況なのに　母上様から漂う香りに鼻をひくつかせてしまった。客間とは異なる花の香りだ。

「本当に女の子なの？ミュー……ちゃん？」

「…………ミューズといいます、奥様」

「ミューズちゃん！ああ、本当なの？奥様だなんてやめて頂戴、お母様とお呼びなさい親子なんですから！」

…………え。

さつと騎士団長に視線を送るとフィツと顔を背けられた。騎士団長以外に説明をしてくれるとすると、お父上様は頭を抱えたままだし、赤い長髪の男性は苦笑してるし、眼鏡の男性は遠くを見ているかのように興味無さ気だし、頼りになりそうな人は居ない。

両手をギュツと包み込まれ、びくついてしまった。何をされるのだろ。嬉々として目を輝かせている彼女に恐怖にも似た感情が沸き上がる。 >br<>br<「まずは湯浴みね！いらっしやいミューズちゃん！」

「え、あ、ま」

助けてはくれないだろう周りの男性陣に、わかっていながら助けを求めるが案の定助けようとする人間は居ない。抵抗などお構い無しにお母上様は手を引っ張っていく。ぱたぱたとまた音を立てながら、彼女と一緒に部屋を出た。

「さて兄上、あの子は一体何なの？」

部屋に残された騎士団長は今の今まで母親が腰掛けていた椅子に座って、弟 二人居る弟のうち黄鯨の騎士団に所属する赤い長

髪の弟の問いを正面から受けた。もちろん父親と、眼鏡をかけた末の弟も同じことを聞きたいだろう。

「うちの子にするとは…… フィリーネが手放さないのを見越してか」

「母上が生き生きなさってましたね」

そう、末のアマデウスが言うように、母上ならば絶対にミューをクロイツ家へと受け入れる。だから何の心配もなく連れ帰ってきた。後で孤児院へ遣いをださなければならぬ、とクツションへ身を沈めながら考える。

「スコール兄上、どうしてあの子の魔力が強いとおっしゃるのですか？」

「神隠しの噂は聞いただろう？」

「黄鯨でも評判の良くない商人が何人が消えたと聞いたよ」

スコールは優雅に深く頷く。赤髪のメルヒオールの黄鯨は主に港や街道を監視し、海賊や山賊を打ち捨てて円滑な商売や税の取り締まりまで行つ騎士団だ。管理下にある商人たちは情報が命である。神隠しの噂はその傾向に該当する商人たちからすると油断ならぬだろう。

「あの子が消してる」

「確かですか？」

末のアマデウスが目をきらめかせた。この弟の悪いところは興味

の有無がはつきりと表に出されて伝わってしまうところだ。アマデウス仕事柄猫を被りすぎて逆に身内の前だと如実に現れてしまうのだろうか。

アマデウスは国の中枢部にいる。外務大臣である父親の補佐を務めながら、土木や治水の知識にも長け、あらゆることから引っぱりだこなのである。もちろん、外交官としての顔もあるので歳や顔かたちで見てくびられないようにするため、嫌な顔一つせずにアドバースや資料作成、陣頭指揮までとってしまふ。スコールやメルヒオールとは違い、器用すぎて本来の性格に歪みが生じ、表情があけすけなまでに分かりやすいという問題になっているといえよう。身内から離れるとそれを見破られることはまずないだろうということ、いまさら家族の誰も咎めたりはしない。

「メイト老に現場を押さえてもらったからね、かなり信用は高い」

「ふむ、魔術省に依頼したのか？」

「いいえ父上、他の人間に横からかつさらわれたくはなかったので」

個人的にね、と小首をかしげてみせるものだから、金髪が顔を半分覆う。少なくともミューは無差別に人間を消していったわけではないのは噂でわかつている。うんうんと嬉しそうにアマデウスが頷く。アマデウスは才ある者が大好きなのだ。

二人の兄は騎士であり、アマデウス自身も剣技はやらされたが性に合わずに、兄上がやれば済むこと、と言ってやめてしまった。そのことをメルヒオールは残念がっていた。メルヒオールが白鷹を望まずに黄鯨を選んだのもアマデウスが情報を仕入れやすいよう国内外に目を光らせやすいからである。甘やかせすぎだとスコールが小言を漏らすこともしばしば見受けられた。

それで、とレオンハルト・クロイツ公が先を促す。

「これからどうするのだ」

「しばらく家の外では性別を隠して小姓として連れ回ろうと考えています、貴族社会も理解してもらいたいですし魔術の使い方も再教育しないと」

「しばらくって……どれくらい？」

「うん？ そうだね、僕の大親友に嫁入りするまで、かな？」

三人の視線がスコールに突き刺さった。魔術の話なんてただのお膳立てだと断定できる。

クロイツ家は格のある家だが、長い間のうちに王族から血縁が少しどころかなり離れてしまっていた。それもこれもクロイツ家にもエーデルシュタイン王家にも例に漏れず女兒が誕生しなかった、という問題があったからだ。王の血がクロイツ家の権力に直接関係がないのはわかっていたが、そうも言っていられない事情が出来たのだ。

現在のところノイル王国には二大勢力が出来上がっていた。クロイツ家とここ数年で台頭してきたロナ家である。先々代のロナ家主が隠居してから愛人に男子を産ませた。これがのちに魔術省で遠距離からの魔術による患者治療法に関する研究を行い、広く治療法を一般化した現当主フォーム伯だ。彼にも子が三人出来たのだが、末の子がクロイツ家よりも勢いづくきっかけとなったのだ。そう、末子は女兒であった。第一継承権を持つ第一王子と歳の頃合いもちょうど良い。花嫁候補の筆頭になるべくしてなったといえよう。

これがクロイツ家が危惧する問題だったのだが、まだ猶予が残っていた。まず一つに、第一王子の隣に並ぶには余りに器量の足りない娘だということだ。髪は渴いた土の色で、ちりぢりにまるくなる

癖がついている。牛のように大きく広がった鼻は糸のような細い目のおかげでとてもよく目立った。それならば、心根が澄んでいるのかといえは不自由なく育ったうえにわがままが通るのが当たり前で気難しく、さらには年端のゆかぬころからの男遊びは知る人は知っていた。どんなに偉業をなしていたとしてもロナ家は失敗作を生み出したと第一王子自身がこぼしたこともある。

養子をとるが性別は非公表、ただし、小姓扱いをして男だと思わせる。そうして油断を誘って屋敷では義母による女性教育で仕上げれば、必ずや興味を持つ。

「まあロナのパラリス嬢に比べるのはミューに対して失礼だよね」

お前の方が失礼だ、とは誰も言えないのはどこかしらロナ家の末子にそのような目を向けていて、半分ところか九割この謀に乗っかっていているからだ。スコールの大親友と婚姻を、と願いつづけているからだ。ふ、と息が噴き出される。一番最初に声をあげたのはメルヒオールだ。

「アーハッハッハッ！兄上サイッター！」

「それならスコール兄上、義弟とも義妹とも言わずに『うちの子』と？」

「ああ。『お宅の弟さん』と言われてもにっこり笑っておけばいいさ」

「届け出はどうするのだ？」

「本当に縁組するか試用中だとしても」

「小姓だしな……わかった。それでいこう」

力強く頷くレオンハルト公に、三人の息子たちも頷き返す。クロイツ家の総領からのお許しを得た。これでもうミューはクロイツの人間となる。

「母上があの子をどこまで変えるのか見ものですねえ……では私は城へ戻ります。メイト老にはすんでのところで逃がしたと。ああ孤児院へも遣いが必要ですね、手配します」

「私も書類整理に城へ」

スコールが立ち上がるのを見てアマデウスも立ち上がる。

「じゃあ私も仕事へ戻ります。母上がやり過ぎないようちゃんと見てくださいよ父上？」

にやりと口の端を持ち上げるとメルヒオールも立ち上がった。出来たら苦労しない、と言いつつ笑って追い払うようにレオンハルト公は手を振った。

メルヒオールの心配通り、息子たちが仕事を終えて帰ってくるまでミューは解放されずクタクタになっていた。義母フィリーネは数日経たのち、やっと満足しミューの着せ替えを終えた。

これでミューは家族の思惑など知ることなくクロイツ家の一員となったのである。

## 白銀の髪と漆黒の髪

### 三 白銀の髪と漆黒の髪

また足が止まる。礼儀正くするのはくたびれる。ふと見上げた天井は巨人でも住んでいるかのように高く。星には手が届きそうだと思えるのにこの天井は全く届きそうには思えなかった。

「じらミコー」

「あ。ごめんなさい」

十数歩先で自分 わたしを待っていたのは、スコール義兄様だ。駆けてはいけない。早歩きでもいけない。大股で優雅に歩くのが貴族として良いらしい。

悪夢のような軟禁生活から解放され、今わたしはスコール義兄様の小姓として生活をはじめている。お義母様は悪気があったわけはないとわかっているから余計に苦しい日々だった。でもそのお陰でお城の中に入っても咎められない程度の姿になったようなので感謝している。肩まである髪は伸ばしたままでは邪魔になるのでリボンで一つに束ね、ズボンの裾をブーツへ押し込むだけでわたしは男の子になる。以前と変わらないようにも思えるが、着ているものの価値は相当なものはずだ。クロイツ家のかつて少年だったお義兄様たちのお古を譲っていただいているのだから、ちゃんと小姓として見える、と思う。

お城の中はわたしにとっていつまでも見飽きない新鮮さがあった。



同じような回廊が幾つもあつたり、細かく彫刻されたドアがあつたり、たくさん馬を飼っていたり。迷子になってしまふ。でもその方が楽しいと気付いてからは焦ったりせず観光をしていた。……探ししてくれるスコール義兄様には申し訳ないがやめられない。

わたしが追い付くとほつとしたようにお義兄様が笑う。貴族になったからと言って性別を公にする必要はないと言われた。そう言われた時のわたしは、貴族でも女の人として生きるのは大変だつてことだな、とのんびりと思ったただけだ。お義母様を思い浮かべると爪先まであのきらびやかさを保とうと磨きあげるといふ手間をただただ凄いと思うからだ。……家に帰るとその作業をお義母様やお義兄様たちの乳母だった女性陣にてんやわんや揉みくちやにされながらされているのだが、一日中女ではないのでまだましだった。ぴつたり張り付いていなければぼろが出そうだと思われていそう。忙しく動き回るお義兄様を見るにつけてそう落ち込む。

「そうだ」

耳を疑う。今の言葉、棒読みじゃないか？

横顔を盗み見しようと目だけを動かすと、ばつちりと合ってしまった。慌てて反らしても当然ながら遅い。

「今日は私の親友を紹介するよ」

「ご親友………」

確かに今までスコールお義兄様の近くにいる方々は白鷹の騎士団の人間なので、お友達とは言えない。規律正しい皆さん以外の人に会うことに俄然興味がわく。

「どのよ……」

「ん？なんだあれは……」

言葉を遮り、顔を回廊の外へ向けている。身体を乗り出すようにしてお義兄様の陰から見えているものを探そうとした。目線の先には見つけれなくて仰ぎ見る。

空に、木の梢の位置に大きな黒い球体が浮かんでいる。黒いのに光り輝くように目立っているのはどうしてだろう。不気味さだけはよくわかった。その球体から、によきによきと何かが突き出して来る。

「……手？」

唸るような低い声でお義兄様が呟く。手の形には見えるが、分厚く長い爪のようなものがくつついていて、土色の鱗のようなものに覆われている。足のような形のものまで黒い球体から突き出して来た。

不意にお義兄様が動く。

耳をつんざくような高い音が回廊中に響き渡る。騎士が持つ警戒の笛だ。何度も音が跳ね返っていつまでも聞こえるため、わたしは耳を塞いだ。目だけは球体を見つめていた。

とうとうスポーツと何かが飛び出したのを皮切りに、土色のものがたくさん飛び出しはじめた。その一つが目先の庭にドスンと落ちてきた。

ひゅっとお義兄様が息を吸い込む。

土色の鱗に覆われ、長く太い爪を持ち、犬のような頭には緑の目が爛々としている。口からはダラダラと唾液が牙を伝って足元へ垂れ落ちた。

「このまま真っ直ぐに回廊を抜けると王家の謁見室がある」

囁いてお義兄様は腰の剣をそっと引き抜いた。行こうとしていた方向はまだまだ先が見えない。ぱっとマントが翻り、視界が真っ白になった。

「振り返らずに走れ!!」

叫ばれてようやくスコールお義兄様が庭へ飛び出したのがわかった。走らなきゃ、と考えながらも足が動かない。スコールお義兄様が一撃でアレが動かなくなったのを見届けてしまった。地面へ崩れたアレから視線を外す。

「走れ!」

もう一度叫ばれてやっとわたしは走りはじめた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4172ba/>

---

神様、ご褒美をください

2012年1月14日19時54分発行